

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(15)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月28日に行われたケルン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

Kölner Stadt-Anzeiger

March 2, 2020

Jens F. Laurson

印象に残る豊かな音色の色彩と広がり

東京のNHK交響楽団による武満徹の《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》からは、ドビュッシーとラヴェルから学んだ、絹の光沢を抑えるかのような釉薬に包まれたフランスの音色を感じた。それに続くブルックナーの《交響曲 第7番》が譜面台に置かれ、そして中央から温かなホルンの奏でる金管楽器とチェロの音色が絡み合う様は、まさにドイツのオーケストラの伝統において最高とされているものだ。カメレオンの如き順応性なのだろうか。いや、寧ろこの見事な公演で、日本の傑出したアンサンブルが交響楽を通じて際立たせた柔軟性と叫ぶべきで、表現の感情移入、印象に残る豊かな音色の色彩と広がりであったというべきだろう。

しかしながら、全てが同じようにはいかなかった。構成と演奏共に、心を奪う程にデリケートで和音と音色の色彩が混和した繊細な武満の後に続いたシューマンの《チェロ協奏曲》はやや失望する内容だった。シューマンの後期作品の執拗な繰り返しと律動感ある環状曲線を日本のオーケストラは上手く結集することができなかったようだ。このことは明らかにソル・ガベッタの独奏にも、植物の葉を襲う軽い病害のように影響を与え、ためらいがちに演奏に入り、ロマン的な叙事詩風の劇的な楽曲を見出すことができなかった。尤も、ガベッタの微細なフィギュレーション並びにオーケストラパートの清澄な演奏は完璧で、とりわけ奇跡的なほどに精確な木管楽器による澄み切ったアインザッツには魅了された。

のびやかで温和

これより明らかに興味深かったのが、アントン・ブルックナーの《交響曲 第7番》だった。ステレオタイプなあり方に抵抗を感じない向きには、カトリックの神聖な雰囲気と儒教の静穏との結びつきに感激することができた。その理由は、首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィにある。他のオーケストラでは格段に権威主義的で颯爽と指揮しているのを経験してきた。これに

対し、本公演では開放的で、オーケストラの自律的な編成力に委ね、ゆっくりとした楽章の情感を強める場面でものびやかで温和に感じられた。解釈が弱めと感じられたのが、ブルックナーがその音楽構造を自己批判していた第一楽章の大詰めにおいてであり、非常にマイルドで悠然と演奏されていた。

ヤルヴィ自身、打楽器の訓練を受けた経験から、テンポとの関係性や韻律の均衡が求められる場面で強みを発揮する。規則的な三拍子のスケルツォはほとんど機械的であったが、それに対しマエストロはフィナーレを圧倒するかのようにはっきりとしたタイミングで構成した。アンコールはヤルヴィが最も好むシベリウスの《悲しきワルツ》だったが、細分されたテンポの転調でも同様であった。

ソル・ガベッタは好ましいアンコール曲を1つ演奏した。ペトリス・ヴァスクスの《ドルチッシモ》の中で、このチェリストの美しい歌声が哀調を帯びたチェロの音色に乗せて伝わると、会場はこの長い夜でどの瞬間よりも静寂に包まれたのである。